

---

## 特集：転換期における福祉国家の国際比較研究 趣 旨

---

以下の6つの論文は、1998年度から3年間にわたって行われた国立社会保障・人口問題研究所の研究プロジェクト「転換期における福祉国家の国際比較研究」の研究成果である。これらは、昨年(2002年)まとめられた『転換期における福祉国家の国際比較研究 最終報告書』に掲載された諸論文を書き改めたものである。

このプロジェクトは、今から19年前の1984年に、当時の社会保障研究所において共同研究が行われ、翌1985年に『季刊社会保障研究』誌上に発表された「社会保障発展パターンの国際比較」という共通テーマを持つ5人(富永健一・平岡公一・武川正吾・三重野卓・下平好博)の論文の再試行にあたる。当時の研究を第1回プロジェクトと呼ぶなら、今回はメンバーの入れ替わりも最小限度に抑えて繰り返された第2回プロジェクトであるといつてよい。しかしこの間に、社会保障をめぐる国際および国内環境は、すっかり変わってしまった。まさにそのことが、この第2回プロジェクトを計画する根本動機をなした。

1984年という年は、ミシュラの『福祉国家の危機』と題する本が出された年で、福祉国家が危機と再編を迎えつつあるという意識は、すでに当時から始まっていた。しかし他方で、この年は福祉国家の収斂理論を代表するウィレンスキーの『福祉国家と平等』が、プロジェクト・メンバーの同僚である下平好博によって翻訳刊行された年であり、われわれは先進諸国の中で日本が置かれた孤立した位置を考えつつ、ウィレンスキーによる日本の低福祉に対する批判に共感した。このような観点から、われわれプロジェクト・メンバーは、わが国における福祉国家についての計量社会学的研究の最初のを立ち上げる、ということを用意したのであった。

今回の「転換期における福祉国家の国際比較研究」は、第1回プロジェクトの分析以後における世界の諸福祉国家の変貌をテーマとする。題名にあるように、テーマはもちろん前回と同様に諸福祉国家の国際比較である。なぜ国際比較をするかといえば、そうすることを通じて国際社会の中での日本の福祉の現状を批判的に見るためである。以下6論文それぞれの基本的な着眼点を、掲載順に簡単に示しておこう。

- (1) 富永論文は、世界の先進諸国が「福祉国家」と「非福祉国家」に両極分解していく経過を分析して、その中で日本の国際的位置を見定めようとした。
- (2) 平岡論文は、社会保障給付費の変動パターンの差異に注目することから、クラスター分析によって、先進諸国と非先進諸国をそれぞれ類型化しようとした。
- (3) 三重野論文は、福祉国家の危機の中で、単線的な発展よりも福祉の類型化が重要であるとして、社会保障給付費の内部構造を、因子分析とクラスター分析によって明らかにしようとした。
- (4) 武川論文は、三重野論文とは異なった面、すなわち社会保障の給付ではなく財源を分析することから、財源による福祉の構造を明らかにしようとした。

- (5) 織田論文は、福祉国家化の要因分析が、従来おもに1時点での国家間クロスセクション分析を用い、それを複数時点について行うというやり方でなされてきたのに対して、時間的変化の中での因果関係を見るためには、時系列データを用いた分析が必要であるとして、クロスセクションと時系列とを同時に取り込んだ分析方法を工夫した。
- (6) 白波瀬論文は、女性の就労決定、性別役割分業に対する意識、誰が家計管理かという家族内マイクロ構造を、マクロな福祉国家レジームの4類型によって比較したものである。

データベースとしては、(1)から(5)までは本プロジェクトの「国際マクロデータ」を共通に用いているが、(6)のみは「ISSPマイクロデータ」を用いている。

第2回プロジェクトの必要を強調したのは私であったが、それを受け入れてプロジェクトに取り入れてくださった国立社会保障・人口問題研究所、多忙な時間を本プロジェクトのために割いてくださったメンバー諸氏(6人の論文執筆者)、とくに研究グループの世話役を務めてくださった白波瀬佐和子室長に、厚く感謝を申し上げる。

(富永健一 東京大学名誉教授)